



TITLE:

星四題

AUTHOR(S):

後藤, 朝太郎; 清水, 眞一; 林, 芙美子; 津留, 繁雄

CITATION:

後藤, 朝太郎 ...[et al]. 星四題. 天界 1939, 19(217): 194-211

ISSUE DATE:

1939-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167807>

RIGHT:

★ 星 四 題 ★

明の字を解く

文字の變化の始めは、山でも、川でも、鳥でも、魚でも、その實物の通りに形にかたどり之を描寫したものが素の原形となつてゐること云ふまでもない。世間では時としてその後世の字形からのみ速断してその古代の天形に遡ることをしないものがある。かやうな見方は往々にして誤断に陥り頓でもない解釋をなすことになる。例へば明の字を解くに、楷書の明の形をとり、日、月、明なりなど云ふ如きその一例である。日はもとの明の字の場合には古くは（挿圖参照）など色々あるのであつて、決して太陽の日の形をしてゐるのではなく、上代人の住宅の家壁の窓の形にかたどつたものである。その窓よりさし込む月光を示す爲めに窓の形と月とを組合せたのに初まつてゐるのである。かくの如き事はすべて古代の實生活に照して調べて見るのがよい。さうしなくては字の生ひ立ちの心持に合しない。（後藤朝太郎）



卯年漫語 兎と望遠鏡

兎と月とは店子と大家の間柄で相當古くからの事でしょうが、兎と望遠鏡はそれとはずつと新しく、時は徳川の末期、處は江戸愛宕山、其山上にさゝやかな茶店を営む老婆が居りました。そしてそこに一臺の望遠鏡が据えられました。一日そこへ遊びに來ました大田南畝の蜀山人をとらへて、其老婆は太田先生でございましたか、誠に恐入りますが、今度こゝに遠眼鏡を据えましたので先生に一つ看板をお願い致したうございますと一枚の板を持ち出しました。先生は快諾され、直に筆をとつて、兎といふ一字を大く書かれました。老婆は驚いて、先生これが看板になりますかと不審がりました。先生は笑ひながら、兎は十二支では卯であらう。卯から數へて卯辰巳午未申酉戌亥子で十日が子（トウメガネ）であらうがな。これは私が學童時代に讀んだ蜀山人物語の一節ですが、近頃私が時々使用します兎庵といふ別號の出所も、實は此の笑話であります。兎は兎と同字ですが、カモフラージュするのに昔も今も師を用ゐるので面白

いではありませんか、呵々。妄言多謝。(清水眞一)

「一人の生涯」の一節

走つてゆく、車窓では、海や湖や、山脈や畑地を、私は窓に凭れて飽きることなく眺めてゐました。夜の車窓では、飛んでゆく村落の灯や、小さい驛々の青いシグナルなんかに、耳に風の吹きこむやうな淋しさを感じたものです。

南の空にひくく、アンタレスと云ふ赤い巨星があると云ふのを何かで読んで、私は、悠々と静かに動かない星空をみてゐました。(林 芙美子)

海王星探訪記

海王星を最非見たいと、前々から思つて居た。太陽系の最外部に近い處を黙々として運行する彼の姿は、常に私の惱裡に描かれて居た夢だつた。殊に昨夏西村製作所から新鏡 $13^{\circ}/m$ 反射を購入してより、愈々此の念が昂つて來た。然し何分にも、對衝時でさへも 7.7 等に過ぎないといふ光度なので、適當な星圖が無いのに困つて居た。

其處へヒョッコリ、「天界」第 214 號“3月の天象”に海王星附近の圖が載つて居るのを見付けた。早速其の夜(3月22日)、早春の黄昏が地平にうっすらと融けるのを待つて、夜目にも白い愛機 $13^{\circ}/m$ 反射を引張り出した。

西天には黄道光が、乳白色の光芒を誇つて居る。アイピースは、太陽や星野に何時も私の愛用する $F=25\ m/m$ Huygens を用ひた。

東天に春の夢を奏でる獅子座に、ファインダ1を向ける。オレンジ色の π 星が美しく視野に入り、89番星も見える。早速「天界」の圖を参照する。

廣視野であるためか、視野内と星圖との同定が割に易しかつた。

π 星附近一帯のスケッチにかゝり、約半刻の後ほど完成、星圖と對照した。

其の結果、 π 星と89番星とを結んだ直線のほど直角の位置に、遂に待望の海王星を認める事が出來た。

落着いた光は、流石太陽系最外部近くを巡る星としての貫録がある様に思へた。我地球人が數へる程位しか見て居ないであらう事を想ひ、寧ろ嚴肅な感じ

〔以下194頁へ續く〕

あたりの要所々々には極めて學理的な水流研究所が設けられ、殆んど生物を取
り扱ふ如き綿密さを以て、ナイル河は調査されてゐる。

歴史に徴すると、ナイル河の水量が測り始められたのは西暦紀元前3600年頃
であり、又、中世、アラビヤ民族がエジプトの國土を征服して間もなき西暦
622年からは、カイロ市附近にニロメータが置かれた。此うした他に比類無き
長年月の研究材料により、先年來、英國の H. H. Turner, J. H. Craig, C.
E. P. Brooks 氏等はナイル河の水量の週期變動を研究して、2年乃至246年の
種々の週期を發見した。此等の複雑な現象の眞の原因が果して何であるか？
今は未だ明らかではないけれど、少なくとも其の大部分は萬象の因である太陽
の活動に歸すべきは言ふを待たない。即ち、人類の文化史を通じて、大ナイル
の研究は、結局、太陽より出でて、太陽に歸するものと言ふべきか！

〔211頁より續く〕

で此星と相對して居る自分だつた。然も一アマチュアの身で幸にも此星と御眼
にかゝれた自分を、有難くも思つた。

適當な圖さへあれば、5⁰/M 級の器械でも見得る事と思はれるから、是非會
員諸氏も試みられる事を御薦めする。(津留肇雄)

本部・岡山・神戸・大阪・京都各支部合同大會

『倉敷天文臺見學と講演會』

1. 日時 六月3日22時より(晴雨不論)

1. 會場 倉敷市倉敷天文臺(本部所在地)

1. 集合場所・時刻 (倉敷迄各自片道) (切符を購入の事)	{	京都方面	京都驛	(第一) 17時02分發	{ 左記に乗車不能の方は 第111列車倉敷着22時 48分にて御越し下さい
		大阪方面	大阪驛	(第二) 17時48分發	
		神戸方面	神戸驛	(五) 18時26分發	
			倉敷驛	(五) 21時30分着	

1. 大會 1. 「天文と大陸政策」

會長 山本一清先生

1. 「各支部交驛座談會」

司會 水野千里先生

1. 「見學觀望會」(曇雨天中止)

指導 岡林滋樹先生

散會後當夜倉敷市内にて一泊、翌4日大原美術館・農研・鷺羽山(國立公園)・後樂園
(日本3公園)等見學の上20時頃京阪神に歸着、費用は旅費・宿泊・食事・雜費等一切にて
約10圓(大阪よりの豫定)。